

大津 歴博 だより

2008
No.73

企画展

かわら

— 瓦からみた大津史 —

平成20年10月11日(日)～11月24日(月)



あっかんべえと舌を出す鬼瓦
真光寺蔵



お猿さんは栗が大好き
桃源寺蔵



多方面に睨みをきかせる三面鬼
観念寺蔵



大津市歴史博物館

「かわらら — 瓦からみた大津史 —」

わが国における瓦の使用は、今から約一四〇〇年前、崇峻元年（五八八）の飛鳥寺創建に伴い、百濟から四名の「瓦博士」が来日したことに始まります。大津でもこの飛鳥時代の瓦が、前期穴太廃寺から出土しています。これが大津での瓦使用の最初であり、以後、白鳳時代には、衣川廃寺・後期穴太廃寺・崇福寺・南滋賀廃寺・園城寺前身寺院など多くの寺院が建立され、また瓦を焼成する瓦窯が構築されるようになりました。

奈良時代には、瀬田の地に近江国の地方行政を総括する国府が設置され、周辺にも官衙や寺院が建てられたことで、多量の瓦が使用されるようになります。また、時の最高権力者藤原仲麻呂の主導により造営された保良宮では、平城京と酷似した瓦が使用されています。さらに平安時代になると、瓦の需要はますます増え、それらの瓦の中に、大津と平安京との関係をうかがわせる京都産の瓦が認められます。

戦国時代には、坂本城と大津城が建てられますが、特に大津城の天主（天守）は、豊臣政権の権威の象徴として金箔瓦が葺かれていたとみられています。また関ヶ原合戦後に膳所城が築かれると、

藩主本多家の家紋「立葵」をあしらった瓦も登場します。

江戸時代初期には、大津の瓦師西村半兵衛が「棧瓦」を發明。瓦界に一大革命をもたらせました。

この瓦は、現在一般の住宅で普通に見られるもので、従来の、丸瓦と平瓦を組み合わせた「本瓦葺」に比べ、軽量で安価なことが利点だったのです。一般住宅への瓦の普及の素地が、この棧瓦の發明によって出来たといっても過言ではないでしょう。また同じ江戸時代、松本村（大津市松本）が瓦の一大生産地として登場し、広範な地域に瓦が供給されるようになりました。活動の時期は江戸時代初期から明治時代と長く、「松本瓦」が大津の瓦の代名詞といった感さえありました。ただ幕末から明治にかけて、市内各地に新たな瓦師が続々登場し、周辺の瓦の需要を満たすことになりました。この時期、瓦生産が、中心から周辺へと広がっていったのです。

明治になると、近代教育の象徴として各地に小学校が建設されることになりました。今も学校名や「学」の文字を入れた鬼瓦が各地に残され、新しい時代の息吹を今に伝えてくれます。それは、まさに瓦にとつての近代の幕開けを意味したのです。

観覧料 一般 六〇〇円（四八〇円）

高大生 五〇〇円（四〇〇円）

小中生 二〇〇円（一六〇円）

※（一）内は前売り・一五名以上の団体・市内在住の方の六五歳以上の方・市内在住の障害者の方の割引料金

主催 大津市・大津市教育委員会

大津市歴史博物館・京都新聞社

後援 BBCびわ湖放送・NHK大津放送局

エフエム滋賀

協力 滋賀県瓦工事協同組合

一〇月二一日（土）

「瓦礫も宝 その2」

講師 青山均（本館学芸員）

一〇月一八日（土）

記念講演会 「大津の古代寺院と瓦」

講師 森郁夫（帝塚山大学教授）

一月二一日（土）

関連イベント「古代の瓦づくり」

山本瓦工業株式会社

一月八日（土）

「西村半兵衛と棧瓦」

講師 平井俊行

（京都府教育庁文化財保護課 建造物担当副課長）

※事前申し込みが必要です。



大棟を飾る予定だった鷗尾
大津市指定文化財 大津市蔵



大津で一番古い瓦 滋賀県教育委員会蔵



ニックネームはさそり瓦
大津市指定文化財 近江神宮蔵



迫力満点の龍 栄泉寺蔵



棧瓦の発明者西村半兵衛作の鬼瓦
尊勝庵蔵



うーさぎ兔 何見て跳ねる
真迎寺蔵



郵便マークの瓦も珍しくなった
仰木郵便局蔵

放浪者・横井金谷の実際の足跡は？

『金谷上人御一代記』の修正の試み

坂本で没した文人画家・横井金谷（一七六一—一八三二）の半生を綴った『金谷上人御一代記』は、日本人が自伝をあまり残さなかった近世以前の時代にあつて、無邪気で面白おかしく、自伝という以上に、読み物や紀行文として、出色の存在です。ただし、自伝としての資料性については、これまでも研究者たちに、その誇張や脚色の多さ、引用やフィクションが少なからず盛り込まれており、時系列も曖昧な点を指摘され、疑問視もされてきました。そのなかで、滋賀県立琵琶湖文化館の上野良信氏が、制作年の判明する作品を「一代記」に組み込み、金谷伝の研究を精力的に発表してこられました。

筆者は、本年の春、企画展「樸亭と金谷」を担当しましたが、調査や準備の過程で、『金谷上人御一代記』が、さらに修正可能ではないかと感じる作品や資料・文献に出会いました。その作業を現在進めているところですが、今回は、『金谷上人御一代記』における紀行の一部を、上野氏の成果に基づきながら、実際に行つた時系列に当てはめて復元してみました。今回、御紹介する以外の部分は、来年度の当館の研究紀要にて発表する予定です。

寛政六年（一七九四）

●近江の歌僧・海量法師が長崎を訪れる（『海量法師日記』）。

長崎逗留中の金谷は、長崎湾の干潟にオランダ人が絵具のコールド（当時、紅毛煮土と呼ばれた。「楮黄」のことではないか）を大量投棄したことを聞き及び、海量法師を誘い、現地までおぶつてゆく。この時に入手した「楮黄」こそが、金谷が終生、作画の彩色に使用していた朱色の絵具であろう。よほど大量に拾得したとみえる。

↓船で天草島富岡（天草郡苓北町）、東光寺（熊本県本渡市）に滞留する。

↓下関、熊谷寺から法話と法然上人絵伝を依頼されるが断る。

↓船で多度津、善通寺、金毘羅山↓大坂着↓草津下笠村に戻る？

●善導大師・法然上人像聯（草津市宗栄寺像）

落款…「甲寅初冬日、阿相大師尊像」・「甲寅初冬日、沙門奏譽謹写」

制作後、赤穂へ戻るか。途中、三木の来迎寺（小野市市場町）で立ち寄り、依頼されて涅槃図を描くか。赤穂・大蓮寺に着。法話と法然上人絵伝を頼まれる。石が崎（赤穂市）の東照庵に移つて年を越す。

寛政七年（一七九五）

赤穂義士原惣右衛門の孫・藤右衛門の娘・ひさ女を嫁に迎える。太守・森右兵衛介が赤穂に入府し、御殿襖絵の命を受けて制作、謝金を賜る。

春から秋にかけて妻と離れて上洛。洛東大仏殿辺の馬町に逗留。豚を一匹飼う。故郷の下笠村ではすでに父母は死に、一族相談の結果、金谷の入る庵を立てて迎えようとするが、妻と一緒に住むことを恥じて辞退（この時に描かれたのが、現在、宗栄寺に残る同年の善導大師・法然上人像の聯ではないだろうか）。

●善導大師・法然上人像聯（草津市宗栄寺像）

落款…「光明大師・東漸大師、尊像」・「寛政乙卯初春日、小比丘妙懂謹写」

この両大師像の聯は、すでに亡くなっていた金谷の両親の追善供養のために描いたか？三回忌か？（四年後に宗栄寺に描く法然上人絵伝ことを考えると）。赤穂に戻る。

●法然上人絵伝4幅（赤穂・大蓮寺藏）

落款…「勅修御伝四十八巻転写し奉承播州赤穂照満山大蓮寺住持晋誉上人の願望によりて洛陽前金谷極楽寺主念仏勧進の沙門奏譽妙懂謹白 寛政乙卯晚秋」

金谷、赤穂在住の気も薄れ、妻とともに伊勢参宮に向かう。これが、のちの長期にわたる名古屋在住のきっかけとなる。

（横谷賢一郎）

ミニ企画展

「今堅田の水車大工」

平成二十年十月二十八日(火)～十二月七日(日)



本堅田で利用されていた踏車

現在のように灌漑技術が発達していなかった時代、低いところにある水を、少し高い水田に移すことは簡単な作業ではありませんでした。発動ポンプの普及は二十世紀にはいつてから、それまでは人力で水を揚げるしか方法がなかったのです。その時活躍していたのが「踏車」と呼ばれる水車でした。回転部分を低位の水がある場所に漬け、羽根を人力で踏みながら車を回転させて水を高い場所に揚げる装置です。水田が干上がるのは、暑い夏場。炎天下に車を踏む作業は過酷なものでした。それでもバケツで水を

下に見上げるよりは、よほど効率的だったことは確かです。こうした作業は、平地でも湖岸の水田でよく行われていました。今堅田には、こうした踏車を製作する水車大工がいました。踏車の構造は複雑で、その製作には高度な技術と独特の道具が必要でした。

今回は、こうした水車大工の道具などを紹介します。

ミニ企画展

「丑年の絵はがき」

平成二十年十二月九日(火)～平成二十一年一月十八日(日)

来年二月末から開催する企画展「木版絵はがき道楽大全―大正・昭和の趣味家交遊録―」の開催を前に、その一部を展示します。

展示する作品は、郷土玩具・燐寸など、当時「趣味家」と呼ばれた、様々な物を集めるコレクターたちが中心となって開催した、年賀状交換会の数々です。今回は、昭和十二年の丑年に行なわれた交換会の作品を中心に、ご覧いただけます。趣味家たちが知恵を絞って考えた、図柄の工夫や見立ては、みなさんの年賀状作りにつきとヒントを与えてくれることでしょう。



第七三回ミニ企画展 大津の遺跡シリーズ7

太鼓塚遺跡

平成二十二年二月二〇日(火)～三月一五日(日)

太鼓塚遺跡は、大津市滋賀里一丁目・高砂町にあります。現在までの発掘調査で、縄文時代から平安時代までの様々な遺構や遺物が発見されています。

縄文時代の遺構については現在のところ確認されていませんが、土器や石器が出土しています。また、弥生時代の溝跡からは多くの土器が出土し、中には完全な形のものもありました。

古墳時代中頃の遺構には、竪穴住居跡があり、壁ぎわの穴から土器がまとまって出土しました。古墳時代後期になると、古墳が密集する古墳群(太鼓塚古墳群)が築かれました。発掘調査の結果、現在約六〇基の古墳が明らかになっています。

古墳群は標高一一〇～一五〇mに位置し、南北二〇〇m、東西四五〇mの範囲に広がり、六世紀中頃から七世紀中頃までの約一〇〇年間に二〇〇基近くの古墳が造られたと推定されています。古墳の墳丘の形はほとんどが円墳で、大きなものは二〇m前後、小さいものは一m以下のものもあります。



古墳群の一角



正方形の玄室をもつ横穴式石室



ミニチュア炊飯具セット

大半が巨石を積み上げた横穴式石室ですが、小石室や土器を棺にしたものもあります。

太鼓塚古墳群をはじめ、大津市坂本から錦織にかけての地域に所在する古墳群の古墳には、他の地域の古墳と異なる特徴があります。まず、横穴式石室の形態が異なります。一般的な横穴式石室の壁面が垂直に近く積み上げられるのに対して、この地域の横穴式石室の玄室は、四壁を徐々に内側に持ち送って積み上げてドーム状にしています。また、玄室の平面形が長方形だけでなく、正方形や横長の長方形のものが見られることもこの地域の古墳群の特徴です。さらに、石室内に納める副葬品にミニチュアの炊飯具セット(カマド・カマ・コシキ・ナベ)が認められます。これらの特徴からこの地域の古墳群は、中国や朝鮮半島と関係の深い渡来人たちの墓と考えられています。また、奈良時代や平安時代の遺構として建物跡も発見されています。今回のミニ企画では、太鼓塚遺跡出土のいろいろな時代の様々な資料を通して、大津の歴史の一端を紹介します。

大津歴博だより No.73
平成20年9月20日

大津市歴史博物館

〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎(077)521-2100
ホームページ <http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp>